

武政資を支援した大友氏はこのころ少弐氏と不仲となった。

大内道頼のその後はわからない。このころ、馬岳で自殺したのであろうか。なお、道頼の子加嘉丸は遁れて宇佐郡麻生谷の奥に隠れ住み、その子孫は庄屋となり、山口と称したという伝承がある。

大内政弘の 文明十年九月、公方と和睦して帰国した大内政弘が太

豊筑奪還 宰府を陥れると陸統と遠近の武士が渡海の祝言を述べに出頭した。その中に、城井越前守俊明（秀道の後見云々）・国分寺住持（神代左馬允貞賢の弟）・馬岳城督右田弥三郎弘量・佐田因幡守忠景・仲間若狹守盛秀・彦山座主頼有法印と子息師律師らがいた。

同年十月三日、少弐政尚に与同した仁保新左衛門尉弘名の首が、筑前守護代陶弘護によって、土居の称名寺門前に三日間、梟された。彦山座主頼有の計略により捕らえられたのだという。

大内政弘の徳政 同年十月六日、大内政弘は、文明元年の夏以来、

長門・周防へ亡命していた豊前・筑前の被官たちに、兵糧料として防長の寺社領を半済（年貢の半分を武士へ与える）としていたが、米銭・借物の返済を免除する徳政令を出した（『大内家』）。

文明十二年二月、政弘は、楞嚴寺住持へ仲津郡立石・香丸兩名と宮市の内、内田法橋跡、上毛郡牧菊丸八町等々の寺領を安堵した。

文明十六年、仲津郡中臣今男名八町が、大内盛見によって常灯料所として宇佐宮へ寄進され、大宮司安心院公増知行のあと、安心院筑後守公重から宇佐宮祈禱僧万徳坊へ毎年一〇石納めることになった。

文明十八年三月、仲津郡の道場寺領一・二町四反余を、政弘は山口の善福寺へ造営料として寄附した。道場寺の前任持晁光が、法門の事をほとんど知らず、俗人と変わらない生活をしているという理由で、寺領を没

収されたとある（『善福寺』）。

悪銭取締り令

延徳四年（一四九二）三月、「豊前国中悪銭事」前において悪銭が流布しているから、取り締まりを厳にせよ。禁制を知らないと申す者があれば、その所の給主や地下役人の越度として、その給地や役職を没収せよと郡代・段銭奉行に命じ、請書を提出させている。なぜか企救・京都・仲津郡の役人名が欠けている。左にその役人を掲げる。

第9表 豊前国の郡代・段銭奉行（十五世紀末）

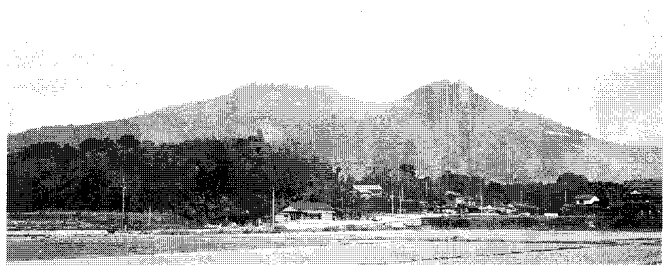
郡名	郡 代	段 銭 奉 行
宇佐	佐田彈正忠 <small>（俊景）</small>	矢部新左衛門尉・橋津六郎次郎
下毛	野中五郎	貫助八
上毛	杉重清家人 広津新藏人	山田安芸守・広津彦三郎・仲八屋藤左衛門尉 城井常陸介・副田右衛門大夫・伊田美作守 <small>（興理）</small>
築城	杉重清家人 内藤新兵衛尉	如法寺孫二郎・荒巻源右衛門尉
田川	未定（杉七郎代）	伊川彈正忠 伊賀利彦太郎

一〇 馬岳攻防戦

去月廿三日、豊前国小馬岳城麓において、凶徒大友勢、同少弐勢、当日悉く追討する合戦の時、太刀討粉骨の次第、杉柰助弘依の注進到来す、尤も神妙、感悦の至なり、弥戦功を抽すべきの状、件の如し、
（二五〇）
文亀元年八月十三日

門司民部水殿（云傍）

（門司文書）（原義文）



馬岳遠望

この山の麓で大内、大友両氏の大合戦が繰り広げられた



大内義興の花押

と、大友親治軍と大内義興軍の大合戦が、馬岳城を巡って繰り広げられた。この合戦の根は深い。この合戦までの両者のいきさつを振り返ってみよう。

大友政親の自害

文明十年（一四七八）、大

内政弘が京都より帰国して豊筑に渡海し、分国の奪回に成功したところ、豊後では、大友政親と義右父子に深刻な対立があり、明応五年（一四九六）、義右は父により毒殺され、政親は家臣の支持を失って、臼杵より舟で筑前国立花城（博多郊外）の親類立花氏を頼って向かったところ、赤間関で、大内氏の家臣に捕らえられ、舟木地藏院（下関市）に幽閉され自害した。政親の妻は大内政弘の妹、義右の妻も大内義興の娘という間柄で、大内氏と大友氏は親密な関係にあった。大友政親は応仁の乱初期は大内氏に協力的で、対馬から太宰府へ侵入した少弐教頼攻撃に手を貸したが、政親の父親繁の意向に沿って、大内氏と対立する細川方（東軍）に与し、豊前・筑前に侵入し

た。大友義右は大内義興に近く、大友家重臣たちも両人の対立によって分裂抗争するに至った。政親派の田原親宗が国東の箕崎で敗死したのもこれに原因したものである。

大友父子の死後、政親の弟親治が、子息義長を家督としようとするが、これに反対する重臣は大友親綱の子大聖院宗心を擁立しようとして失敗し、周防へ亡命した。宗心は大内義興の力を借りて帰国の機会を窺うことになる。一方、大友親治も、杉平左衛門尉武明らと通謀して、義興の弟で氷上山興隆寺の僧であった尊光を還俗させ、高弘と称して大内家督としようとしたが失敗し、武明は自殺、高弘は豊後に逃れて、大友親治の食客となった。こうした両家の対立に、中央情勢が絡んで緊迫する。

大友親治の

足利義視の子義材（義植・義尹）は管領細川政元と対

豊前侵入

立して、近江から越中へ奔り、やがて朝倉氏の応援を

得て、入洛しようとしたが、近江坂本で六角高頼に敗れて、河内国へ遁れ、さらに大内義興を頼って山口へ下向してきた。大内義興は領国を固めてから上洛しようと考えたから、公方義澄（義高）と細川政元は、大内氏周辺の大名少弐・菊池・大友・阿蘇・大内太郎左衛門高弘等や国人に呼びかけて、義興の上洛を阻止させようと画策した。当然、大内氏の分国を切り取った者へ、守護職を与えることを約束した。大友親治はこれに代えて豊前に侵入を開始した。

『佐田泰景軍忠状』は、この時の両家の戦争を比較的詳しく伝えているので、泰景の行動を追って、両家の動勢を見ることにする。

明応七年（一四九八）十月、大友勢が東部国境より佐田庄に侵入し、佐田氏を攻撃した。佐田氏は菩提寺に籠城して、大内氏の援軍を待った

が支えきれず、西隣の飯田但馬守の宅所へ移り支えていたとき、周防より援軍が到着したが、敗れて周防へ撤退し、大友勢が豊前を制圧したらしい。

妙見岳城の攻防

翌八年七月、杉弘固（とと）に従って帰国し、寒田城（築城郡）を攻略し、十月、宇佐郡香下（香下）の妙見岳（標高四四四メートル）に城郭を構築して楯籠った。

間もなく、豊後一国の大軍が到着し、妙見岳を包囲したが、急には攻められず、一部の兵を残して、豊前西部の大内方を追い払ってのち、妙見岳の総攻撃に移り、これを攻略した。佐田泰景らは捕虜となって豊後府内に幽閉されていたが、翌九年正月、府内を脱走して佐田庄へ逃げ帰り、さらに、赤間関に亡命していた豊前衆に合流した。

文亀元年（一五〇一）正月、再渡海して妙見岳城を奪回したが、大内方の軍勢が足りないというので、佐田泰景も渡海して中津川に上陸し、築城郡本庄城の城井日向守（弘房の弟直重）を攻略し、さらに馬岳城を後ろ巻きした。城井氏は兄弟で敵味方に分かれて戦ったらしい。

この年三月十三日、大内義興は、築城郡高塚村（京都北野神領）の代官職を西郷藏人資正（資正）へ与えた。一定の年貢を京都へ送れば余得分を収入とした。城井日向守の跡であろう。資正はこの年七月七日子の弥七郎正満へ一跡を譲りして、馬岳合戦に臨んだ（西郷）。

杵尾崎の合戦

閏六月二十四日、杵尾崎の合戦で、大内氏の部将仁保左近将監護郷（護郷）が戦死した。この時、護郷に同道した者三三人が戦死、三〇人が負傷した。

七月二十三日、馬岳を包囲する大友・少武勢を大内後ろ巻き勢が小馬岳の麓で攻撃し、双方多数の死傷者を出したところで、前將軍義尹（義尹）の調

停が入り、和睦が成立して、大友勢が撤兵したらしい。

京都では、細川政元が殺されたあと、養子細川澄元（澄元）に代わって、細川高国が主導権を握るに至って、情勢が変わり、前將軍義尹が招かれた。

大内義興管領代に

永正四年（一五〇七）十二月、大内義興は義尹を奉じて上洛の途につき、翌八年入京して、細川高国を管領、義興は三管領の家ではないため、管領代として約一〇年間、幕政を牛耳った。大内氏全盛時代の到来というべきであろう。

大内氏富強の原因に貿易がある。大内氏は、はじめ朝鮮との貿易に熱心で、義弘時代の応永二年（一三九五）に始まり、彼我の使節は毎年のように往来し、応永六年には、朝鮮国王の定宗にあてて、大内氏が百済王の後裔であるから、百済の地を一部与えられたいと申し送ったという。

大内盛見は応永十年に貿易を再開し、これまた毎年のように交易船を送った。大内氏の輸出品は樟脳・犀角・蘇木などの南海産と絹織物・刀剣・扇などの工芸品であった。南海産は、博多商人が琉球から取り寄せたものである。輸入品は木綿が中心で、人参や虎皮などであった。大内政弘のころは、政弘自身二―三年ごとに交易船を送る一方で、分国内の家臣も勝手に交易を行った。その中には彦山座主や「豊前州蓑島海賊大將玉野井藤原朝臣邦吉」（邦吉）なる者もいた。

大内義興時代には、朝鮮側が赤字貿易に苦しみ、交易品の価格を統制したり、交易量を制限したため、朝鮮の三浦（富山浦・齊浦・塩浦）に住む倭人（恒居倭）の不満が高まり、永正七年（一五二〇）反乱を起こして鎮圧された。これ以後、一層厳しく制限されるようになって対朝鮮交易は衰えていった。

勘合貿易を独占

このころ、大内氏が熱心であったのは日明貿易である。大内氏が明へはじめて交易船を送ったのは享徳二年（一四五三）のことで、九隻のうちの一隻を大内氏が仕立てた。次の寛正六年（一四六五）の遣船は、前回が多過ぎたため、一〇年一貢、三隻と制限され、一隻が幕府船、二隻船が細川船、三隻船が大内船で、門司において傭船された。以来、大内氏が博多商人と結んで、堺商人と組む細川氏と競い、永正七年の遣明船が持ち帰った勘合符は、公方義尹が管領代大内義興に保管を命じ、日明貿易はすべて大内氏に一任するという御内書を与えた。大永三年（一五二三）には、明の寧波の港で、大内船と細川船が合戦した（寧波の乱）。それ以後、二回の派遣は、三隻とも大内船で占め、大内氏が唐物を独占的に扱った。

日明貿易の輸出品は銅・硫黄・刀剣・扇などで、輸入品は銅銭・生糸・絹織物・桑草などであった。この貿易の利益は四、五倍にもなったという。一隻の請負に三〇〇〇―四〇〇〇貫文を納めたというから、三隻だと、筑前一国の公領年貢が二〇〇〇貫であったから、その五倍もの収入になったわけである。

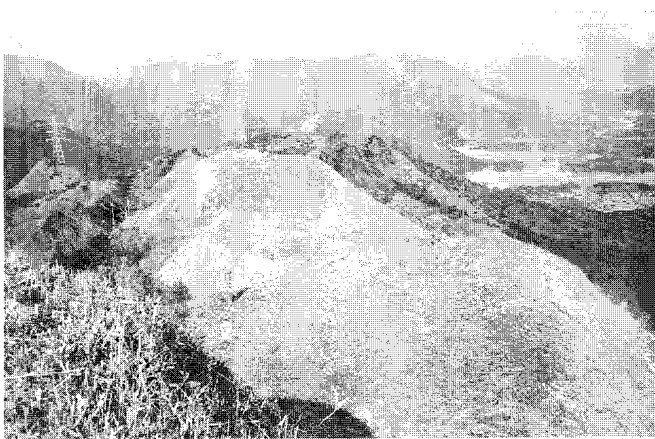
撰 銭 令

日明貿易の最大の目的は銅銭を輸入することであった。しかし、大量の銅銭の国外流出に困惑した明は、その持ち出しを禁止するに至ったため、銅銭が不足して私鑄銭が通用するようになり、国の内外で私鑄銭が鑄造された。大内氏は段銭の徴収にあたり、一〇〇文のうち二〇文は永楽通宝か宣徳通宝でなければならぬと定め、売買においては一〇〇文中三〇文は良銭でなければならぬと定め、これを守らない豊前国では、特に厳しく役人たちに監視させた。

春秋段 銭

大内氏は段銭奉行を任命して、分国内の隅々にまで、田一段につき八〇文か一〇〇文の段銭を春秋に分けて徴収させ、これを大内家の財源としたが、京都の天皇や公方が臨時に必要とする費用の献金を求められると、加増反銭と称して増額徴収した。段銭を滞納する土地はどしどし差し押さえ、年貢から未納段銭分を差し引いた。宇佐神領の段銭は、社殿等の造替費用に充当された。

大内義興が管領代として、一〇年間ほど在京していたとき、段米が徴収されている。良銭の不足で、段銭徴収が困難であったのか、米を京都に上せて、米相場に参加



障子岳城本丸より、二の丸・三の丸址を望む

に上せて、米相場に参加したのか、数千人の兵を在京させて、食糧の調達が困難であったため、米を上せたのか、今後の研究を待ちたい。

障子岳築城

また、大規模となるに従って、城誘や陣夫のために、農民がしばしば徴発された。明応八年（一四九九）の妙見岳（宇佐郡）築城や、大永二年（一五二二）の障子岳（勝山町）築城には、豊前国中の農民が

動員されて、峻険な山上へ、材木や石を運び上げさせられる苦痛は想像にあまりある。宇佐神領では、障子岳築城役を勤める代わりに、宇佐宮社殿造替人夫を勤めることを赦されているが、大永三年の陣夫役については、陣夫日数の三倍の社用人足を勤めることになっている(『小山田』)。

明応六年二月、大友親治は求菩提山領三〇町を還附している。『佐田文書』によると、大友氏の豊前進入は明応七年十月となっている。明応六年には、豊前国守護職を公方義澄によって、大友親治へ与えられているのであろうか。

このころ、国東の武蔵田原氏は京都郡内で、下崎一五町、荒津に二〇町、稲光五〇町、入学で二〇町、黒田に二〇町、津隈庄に三〇町分を預け置かれている。京都郡奉行か城督に配置されたい(『田原達三』)。

一 一 朽網親満の乱と伊良原

宇佐宮の下宮社司永弘家の文書に、次のような史料がある。断簡であるため判読に苦しむが、今まで、知られていなかった伊良原に関するものであるから引用してみたい。

一、古庄石馬助方の事、一段帳行仰せ^(付カ)られ、去る八月廿六日より、父子共、^(大分市)府中ニ召し籠め候、色々儀を以て、旧冬十一日この境へ越され候て、吉弘新兵衛方・小田原兵部方・倉成縫殿亮方同道候て朽網方宿所道陽寺え越され、国中の儀、穩密を以て相談し候、御人跡の儀、いか有るべきの通り、かの方申され候の処、この間申し定む分ニ候由、親満申され候、その儀相定め候ひおわぬ。同心申し難き通り、古も候、吉も候、しさいニ申され候

一、この儀につき、一万田六郎方十二月廿日、日田方へ越され候、同廿三日日田境伊らわら申す所へ、親満、宿を替えられ候、同廿九日頃、かの四

人方へ飛脚を遣わされ、早々伊良原のことく御越候へ、相談申すべき子細申され候、この儀につき、かの四人、今月三日早朝、伊良原様ニ越され候て、去る九日帰宅し候、
(原撰文様)

この意味を要約すると、豊後で拳兵に失敗して豊前へ遁れてきた朽網親満が道場寺(行橋市)に潜伏していたが、永正十三年(一五一六)十二月二十三日、伊良原へ移って、再拳兵のことを国東の四人と相談しようとしているのである。

朽網氏は、大友氏初代の能直に従って関東から豊後へ下向し、直入郡



大聖院宗心の花押



田原親述の花押



朽網親満の花押

朽網郷(久住・直入町境付近)に住み、近辺の大野郡や玖珠郡にも所領を広げていた。嘉吉の乱(二四四)のころより、備後入道法祥(繁貞)親満と三代にわたって大友氏家老(加判衆という)を務めた。特に親満は、肥後の菊池氏滅亡に殊功を挙げ、明応六年(一四九七)ごろより永正八年(一五〇九)ごろまで加判衆を務めたが、大友義長の勘気でも受けたのか、加判衆から外され、義長の子義鑑の代初めである永正十三年、「陰謀人」として成敗を受けた。一命を免れた親満と同者は、一部は日向や肥後へ遁れ、一部は玖珠郡高勝寺城(切株山)や松木城等に籠城したのである。玖珠郡に籠城した一部の